雑俳における漢字使用状況

――『青木賊』の場合（二）――

西　譲二

はじめに

本稿は『成城文藝』第一一二号（昭和六十年十月）において報告した「雑俳における漢字使用状況――『青木賊』の場合――」で掲げ得なかった次のものについて報告するものである。

一　全く振り仮名の与えられていない漢字およびその用例

二　振り仮名の与えられている場合の少ない漢字

三　漢字字種の使用度数

四　字音の用法のみの漢字と字訓の用法のみの漢字

対象とした資料については可能な限りの分析を行うべきであるが、今回は右のものについて示すこととする。仮名遣い、および字音語や仮名表記をとる語などについては別に譲ることとする。

前報告発表後も、ある一つの資料における使用漢字の総体を示す研究ならびに報告は、山田俊雄氏、山田貞雄氏、およびエツコ・オバタ・ライマン氏により、着実に進められている。[注(1)] 調査対象やその発表の方法等については多少の相異はあるものの、比較することの可能な状況にあり、今後とも、このように結果が比べられるかたちで異なる資料の調査が行われることが重要であると考えられる。

今回の報告にあたり、『青木賊』について細部にわたり再調査および漢字索引の見直しをした結果、さきに報告した内容に変更を加える必要が生じたので、はじめに訂正をしておく。字種については、前報告で一一一一字としたが、これを一一〇九字に、また総漢字数は五一二〇字を五一五三字に訂正する。振り仮名の与えられている漢字を四〇〇九字としたが、これを四〇八五字に、また、振り仮名の与えられていない漢字を一一一一字としたが、これを一〇六八字に訂正する。従って、全体における振り仮名の与えられている漢字の割合、および振り仮名の与えられていない漢字の割合は、前者を七八％から七九％へ、後者は二二％から二一％へそれぞれ訂正する。

一　全く振り仮名の与えられていない漢字およびその用例

全く振り仮名の与えられていない漢字について、以下掲げる。掲出にあたっては、まず該当する漢字を索引での掲出順に配し、すぐ下に（　）で用例数を示した。また、用例そのものは索引での掲出法に従って用例数の下に示すこととした。[注(2)] これにより、どの漢字がどのような状況で振り仮名が与えられていないかということへの理解が深められるであろう。全く振り仮名の与えられていない漢字は二七字である。

阿(1) ‖
—波 8オ8
匂(1) にほふ
—ふ 13オ1
宇(1) —ウ
一—22オ5
晦(1) ‖
大—日 46ウ10
會(1) クワイ—
—所 14オ2
貫(2) —クワン—
五—文 24オ7
—クワン
百—41オ3
九(5) ク—
—百日 25オ8
—軒(けん) 34オ8
—ク—
源—郎 84オ10
—ク
十八—21ウ3 86ウ8
共(1) —ども
かり子—45ウ3
京(5) キャウ
—30オ2 40オ3 46オ10 100ウ5 106オ6
計(1) ばかり
—り 23オ7
源(2) ゲン—
—蔵 22オ9
—九郎 84オ10
皇(1) —ワウ
天智天—10ウ3
候(2) そろ
—90オ3 93オ4
七(6) シチ—
—合 13オ9
—軒(けん) 19ウ5
—日 41ウ2
—合入り 95ウ9
—年 102オ9
—シチ—
惡(あく)—兵衛 27オ3

秋(1)
—シウ—　千—樂20ウ5
戎(1)
—えびす　初—30ウ9
清(1)
セイ—　—書31ウ5
銅(1)
—ドウ　十二—36ウ4
八(9)
ハチ　—ア92オ9
ハチ—　—良兵衛96ウ10
—ハチ—　二—チ日93ウ8
—ハチ　五良—36オ5
—ハツ—　十—九21ウ3　86ウ8
や—　—百や9オ5　—百屋37ウ3　—重太夫場31オ4
百(11)
ヒャク　—84ウ5　84ウ5
ヒャク—　—ヅヽ10オ10　—人一首30ウ8　—貫41オ3　—度參り104オ8
—ヒャク—　五—両7オ6　九—目25オ8
—ヒャク　五—80ウ10
—ほ—　八—や9オ5　八—屋37ウ3
不(7)
フ—　—肖〳〵に24ウ10　—出來32ウ5　—自由38ウ8　—義40ウ5　—埒なり81オ1　—淨90ウ4　—孝96オ2
兵(3)
—ビャウ—　惡七—衞27オ3
歟(4)
か　言ヲ—と20ウ3　乘せた—29ウ5　お立チ—と88ウ7　もふ—イナ94ウ4

用(8)　ヨウ　—9オ2　11ウ4　17ウ4　39オ10　45オ5

ヨウ—　—意8ウ4

—ヨウ　胸ナ筭—38ウ7

もちゐる　—ひた83オ4

両(3)　リヤウ—　—方に20ウ1　—川口47オ6

—リャウ　五百—7オ6

郎(5)　—ラウ　姉女—12ウ6　栄五—16オ1　源九—84オ10

(6)　さま　—97オ10

—さま　婆—92オ3

—さん　とゝ—16オ4　かゝ—11ウ2　88オ2　追剝—49ウ10

この二七字は、山田俊雄氏の『新木賊』の調査[注(3)]での字数である四三字に比べるとかなり少ない。『新木賊』と『青木賊』とで、共通して全く振り仮名の与えられていない漢字は、

京　七　百　不　兵　歟　両　郎

である。

また、山田俊雄氏が全く仮名の与えられていない漢字について指摘された性質も考慮に入れねばならない。その性質

とは次の五つである。

㈠いはゆる漢数字「三・七・廿・百・六」を含む。

㈡「也・歟」のやうなもと漢文もしくは書下しの漢文訓読に由来する助字。

㈢「京・江・淀・伏」のやうに地名にかかはる用字。

㈣「衛・左・兵」のやうにもと官職名で、後に人名に用ゐられた語にかかはる用字。

㈤「不」のやうな漢語の語構成にあたつて否定の意を付加する接頭辞。

この指摘は、『青木賊』においてもあてはめて考えられるものであろう。

なお、「𠮟」は接尾辞として右引用の性質に加えうるかとも考えられるが、「様」の方には振り仮名が与えられているなど、さらに調査すべきものとしてここでの判断はさしひかえる。[注(4)] また、「用」はこの五つの性質にあてはまらないものである。

二　振り仮名の与えられている場合の少ない漢字

上記の全く振り仮名の与えられていない漢字を考える場合に考慮しなくてはならないのは、振り仮名の与えられている場合が少ない漢字についてである。これら振り仮名の与えられる場合の少ない漢字の中には全く振り仮名の与えられていないものに準じて考え得るものも含まれる可能性があるからであり、以下これらの漢字を掲げる。ただし、「振り仮名の与えられている場合が少ない」というのはあいまいであるので、ここでは、用例のうち半数以上に振り仮名の与えられていない漢字について取り上げることとする。掲出にあたっては、該当する漢字を索引順に配し、その漢字の全用例中に占める振り仮名の与えられていない場合の用例数を分数で示す。

医(2/4)　一(18/24)　壱(5/6)　引(9/12)　衞(4/5)　屋(22/30)　火(3/6)　月(8/13)　魚(2/4)　兄(2/4)
玉(2/4)　見(62/78)　戸(10/20)　五(9/10)　口(16/27)　合(16/26)　今(6/12)　三(11/15)　山(12/18)　四(2/4)
事(13/25)　舟(5/7)　十(10/11)　出(35/66)　上(21/35)　人(30/51)　世(4/8)　折(4/5)　太(6/8)　大(13/24)
旦(2/4)　中(10/15)　町(7/14)　長(6/13)　帳(4/8)　弟(2/3)　田(3/5)　度(6/10)　那(2/4)　二(11/15)
入(23/43)　女(24/37)　文(8/12)　返(3/5)　房(12/18)　茂(2/3)　也(19/20)　藥(2/3)　又(11/13)　礼(2/3)
六(4/6)

また、使用度数が二回で、その一方が振り仮名の与えられていない場合であるという漢字は、次に示す一三字である。

意　加　竿　慶　虎　講　春　順　少　勢　徳　坂　佛

右に掲げた中で、振り仮名の与えられている場合が一例のみというものは、使用度数が二回でその中の一例が振り仮名の与えられていない漢字の場合と、使用度数が三回でその中の二例が振り仮名の与えられていない漢字の場合とを使用度数が少ないものとして除けば、次の六字である。

壱　衞　五　十　折　也

また、振り仮名の与えられている場合が二例のみというものは、使用度数が四回でその中の二例が振り仮名の与えられ

ていない漢字の場合をやはり使用度数が少ないとの理由で除くと次の六字である。

舟　太　田　返　又　六

次にこの「壱」以下「六」までの一二字について、その使用状況を略述する。

「壱」は字音の例の「イチー」と熟字訓として処理した「ひとり」の例のうち、振り仮名の与えられているのは「壱人（ひとり）〈」（28ウ8）のみである。振り仮名の与えられていないもので「ひとり」と読み得る例は三例（39オ1　45オ9　97オ5）であり、その他の二例（9ウ9　43オ6）は数量にかかわる例である。

「衞」は「エー」「ーエー」「ーエ」の字音の用法のみであるが、振り仮名の与えられているのは「衞士（ゑじ）」（37オ5）のみである。振り仮名の与えられていない他の四例（25オ10　27オ3　47オ7　96ウ10）はすべて人名にかかわる例である。

「五」は字音の「ゴ」「ゴー」「ーゴー」と字訓の「いつ」のうち、振り仮名が与えられているのは「五ツ月（いつつき）」（16ウ10）のみである。振り仮名の与えられていない他の例は数量にかかわる例（7オ6　8ウ8　12オ8　24オ7　47オ9　80ウ10　101オ9）と人名にかかわる例（16オ1　36オ5）である。

「十」は字音の「ジフー」「ージフー」「ージフ」と字訓の「ーそー」のうち、振り仮名の与えられているのは「大三十日（みそか）」（27ウ10）のみである。振り仮名の与えられていない一〇例（7オ6　8ウ8　21ウ3　36ウ4　37ウ10　38オ10　84オ8　86ウ8　94オ10　97オ6）は数量にかかわる例であり、このうち（84オ8）と（94オ10）の二例は「大三十日」の字面である。

「折」は「をる」「をり」「をりー」「をれー」の字訓の用法のみであるが、振り仮名の与えられているのは「（よいかげん）姉のを着せて我折母」（29オ7）のみである。振り仮名の与えられていない他の四例（23ウ1　23ウ10　24オ5　33オ10）はすべて「リ」および「レ」というかたちで送り仮名がつけられている。

「也」はすべて字訓の「なり」の用法であるが、振り仮名の与えられているのは「（心ほど）嫁も下戸也聟も下戸」（82オ8）のみである。振り仮名の与えられていないのは一九例（9ウ6　10ウ8　13オ1　13オ10　19オ3　19オ8　19オ8　21オ4　25ウ6　26オ2　28ウ7　33オ2　40ウ6　43オ3　44オ5　88オ10　97ウ6　101ウ9　105ウ10）である。

「舟」は「ふね」「ーぶね」の字訓の用法のみであるが、振り仮名の与えられている二例は、「はしり舟」（83オ10）と「木の葉舟」（88ウ7）である。振り仮名の与えられていないものは「舟」（13ウ8　87オ5）と「ふしみ舟」（10ウ8）「わたし舟」（17オ8　26ウ10）の五例である。

「太」は字音の「ータ」「ーダー」「タイー」と字訓の「ふとー」のうち、振り仮名の与えられている二例は「太鼓」（102ウ10）と「太煙筒」（15ウ5）である。振り仮名の与えられていない例は、「駒太夫場」（11オ9）、「春太夫」（21ウ3）、「八重太夫場」（31オ4）、および人名での「長太」（86オ1　93ウ7　102オ8）である。

「田」は字訓の「ーた」「ーだー」「ーだ」と熟字訓の「いなか」のうち、振り仮名の与えられている二例は「隅田川」（88オ7）と「田舎客」（103ウ10）である。この「隅田川」の例は地名に準ずるものと考えるならば、山田俊雄氏の指摘された性質にあわないものである。この「田」で、振り仮名の与えられていないものは地名を含む「梅田道」（35ウ4）と普通名詞の「青田」（31オ9）と「ふけ田」（35ウ2）である。

「返」の用例はすべてが「へんじ」の例で、（25ウ4）と（35ウ8）の二例が振り仮名の与えられているものである。

振り仮名の与えられていないものは三例（14オ8　19オ3　32オ2）である。

「又」の用例はすべてが「また」の例で、（16オ4）と（100ウ3）の二例が振り仮名の与えられているものである。振り仮名の与えられていないものは一一例（7ウ3　14オ6　14ウ3　25オ5　32ウ3　36オ10　36オ7　41ウ4　45オ6　48ウ10　49ウ1）である。

「六」は「ロク」「ロクー」「ーロク」「ロッー」の字音の用法のみであるが、振り仮名の与えられている二例は「（とゞきませぬ）六味（ろくみ）をちつとあがつて見」（17オ10）と「（最ふ出來る）六方（ろつぱう）でせいも口の口」（102オ4）である。この二例はそのもとの意味は数量にかかわるものであるが、普通名詞としてとらえ得るものである。

ここに示した漢字のうちのいくつかは山田俊雄氏が『新木賊』について示された全く振り仮名の与えられていない漢字四三字の中に見ることができる。また、同氏の指摘された五つの性質に照らして見た場合、この『青木賊』においても『新木賊』とほぼ同様の状況を示していることがわかる。ただし、この性質に該当する漢字であっても、普通名詞の用法としうる場合はこの限りではない。一方、山田俊雄氏の示された四三字と比べて、共通しない漢字が多くあることについては、対象とした資料の内容上の差異および量的な問題によるものと考えられる。これは、多くの資料について同様の調査を積み重ねることにより解決されねばならない点である。

三　漢字字種の使用度数

『青木賊』で用いられている漢字一一〇九字のうち、使用度数が五回以上のものについて、その用法をもあわせて次に示す。掲出方法は、山田俊雄氏の『新木賊』での調査に従うものとする。すなわち、縦に、順位、使用度数、該当漢字、字音の例（片仮名で示す）、字訓の例（平仮名で示す）、熟字訓の例（表記とよみを示す）の順に配する。同一使

用度数のものは索引での掲出順とする。字音、字訓はいわゆる字音仮名遣い、古典仮名遣いによるものとする。字訓での動詞の活用形と名詞形についての処理も山田俊雄氏の方法にならうものとする。該当するもののない箇所は○印で示す。

順位	字	音	字訓	熟字訓
1	78	見	ケン	みる　みえる　みせる	○
2	71	居	キョ	ゐる　ゐ　すわる　すゑる	敷—しき
	71	子	シ（ジ）	こ（ご）	扇—あふぎ　銀—かね（がね）　神—みこ
4	66	出	シュツ	いだす　だす　でる　で	息—むすこ
5	55	手	ズ	た　て（で）	○
6	51	人	ジン　ニン	ひと（びと）　て	下—へた
					かゝり—うど　狩—かりうど　黒—くろと
					素—しろと　仲—なかうど　仲—なかど　壱—ひとり　二（弐）—ふたり
7	46	母	モ	はは	乳—うば　伯—おば
	46	來	ライ	く　くる	○
9	43	入	ニフ	いる　いれる　いり　いれ　しゆむ　はひる　しむ	—梅つゆ　這—はひる

10 37	女	デヨ ニヨ ニョウ	をんな め	瞽目ーごぜ 隠ーこそ
11 36	日	ニチ	ひ（び） か	昨ーきのふ ー和ひより
12 35	家	カ ケ	いへ や	隠ーかくれが
35	上	ジャウ	あがる あげる あがり あげ	○
			うは うへ	
14 33	下	ゲ	した しも	ー手へた
15 32	氣	キ	○	○
16 30	屋	○	や	○
30	仕	シ	し する	○
18 28	成	ジャウ	なる	○
19 27	口	ク コウ	くち	○
20 26	合	ガ ガフ	あはす あひ あふ	○
21 25	事	ジ	こと（ごと）	○
25	夫	フ（ブ） フウ	つま をっと	女ーめをと
25	立	○	たつ たち（だち） たてる たて	○
24 24	一	イチ イツ	ひと ひとつ	○
24	有	○	あり	○
24	大	タイ（ダイ）	おほ おほし	○

27 22 所 ショ（ジョ） とこ ところ（どころ） 其ーそこ 何ーどこ

22 頭 ト トウ（ドウ） ○ 牽ーたいこ

ヅ ヂュウ

29 21 取 ○ とり（どり） とる ○

30 20 戸 コ（ゴ） と（ど） ○

20 行 カウ ギャウ アン ゆく ○

20 親 ○ おや ○

20 也 ○ なり ○

34 19 間 ケン あひ ま ○

19 小 セウ お こ ○

19 知 ○ しらす しる しれる ○

37 18 後 ゴ コウ うしろ のち ○

18 山 サン やま ○

18 士 シ（ジ） ○ 馬ーまご

(40) 18 心 シン ここ こころ（ごころ） ○

18 乳 ○ ち（ぢ） ち ち ー母うば

18 房 ハウ（バウ） ボ ○ ○

18 夜 ヤ よ よる ー這よばひ

44
17 去 キョ コ いなす いぬ さり ○
17 茶 チャ ○ ○
17 寐 ○ ねる ねさす ねん ○
17 付 ○ つき つく つけ つける ○
17 敷 ○ しき しく ―居しき
49
16 客 キャク ○ ○
(50)
16 呼 ○ よび よぶ ○
16 先 セン さき ○
16 同 ド ドウ おなじ ○
16 道 ダウ みち ○
16 無 ム なし ○
55
15 嫁 カ よめ ○
15 銀 ギン かね ―子かね（がね）
15 三 サ サン み みつ ○
15 持 ○ もち もつ ○
15 水 ス スイ みづ ―鶏くひな
(60)
15 跡 セキ あと ○
15 中 チュウ（ヂュウ） なか ○

15 丁 チャウ ○ 一兒でっち ○
15 二 ニ ふた ふたつ 一人ふたり 一日ふつか ○
15 物 モツ もの ○
15 文 ブン モン ふ ふみ（ぶみ） ○ ○
66
14 義 ギ ○ ○
14 高 カウ たか たかい ○ ○
14 座 ザ ○ ○
14 兒 ニ ○ 丁一でっち
(70)
14 娘 ○ むすめ ○
14 舩 セン ふな ふね ○
14 町 チャウ まち ○
14 灯 チン ひ ○
14 賣 ○ うり うる うれる ○
75
13 月 グワツ つき ○
13 長 チャウ なが ながい ○
13 通 ツウ とほす とほり とほる ○
13 内 ナイ うち ○
13 買 ○ かふ ○

(80)

13 嗅 ○ かか ○

13 又 ○ また ○

82

12 引 ○ ひき（びき） ひく ひっ ○

12 花 クワ はな ○

12 顔 ○ かほ（がほ） ○

12 遣 ○ つかひ つかふ やる ○

12 今 コン いま いんま ー朝けさ

12 根 コ コン ね 男ーまら

12 寺 ジ てら（でら） ○

12 妾 セフ てかけ ○

(90)

12 相 サウ シャウ あひ ○

12 足 ○ あし たす たる 片ーかたし ー袋たび

12 置 ○ おき おく ○

12 咄 ○ はなし（ばなし） はなす ○

12 風 フ（ブ） フウ かざ かぜ 南ーようず

12 味 ミ あぢ うまい むまい ○

12 聞 ○ きき きく ○

12 理 リ ○ ○

12 戻 ○ もどり もどる ○

99 11 我 ガ わが われ ○

(100) 11 江 ○ え 遠—とほたふみ

11 産 サン うみ うむ うまれる 土—みやげ

11 十 ジフ そ ○

11 身 ○ み ○

11 針 ○ はり ○

11 新 シン あら あたらしい さら にい ○

11 切 セツ きり きる きれ ○

11 帯 タイ おび ○

11 店 ○ みせ たな ○

11 百 ヒャク ほ ○

(110) 11 方 ハウ（パウ） かた 此—こち

11 木 モ モク き こ ○

11 本 ホン（ポン） もと ○

11 目 ○ め ○

115 11 野 ○ の ○

10 音 ○ おと ね —信おとづれる

10	御	ギョ ゴ	お おん	○
10	古	コ（ゴ） コウ	ふる	○
10	五	ゴ	いつ	○
10	尻	○	しり	○
(120)				
10	初	ショ	そめ はじめて はつ	○
10	書	ショ	かき（がき） かく	○
10	場	○	ば	○
10	神	ジン	かみ	—酒みき —子みこ
10	待	○	まち まつ	○
10	度	ド	たい	○
10	白	ハク	しら しろ しろい	—眼にらむ —雨ゆだち
10	鼻	○	はな（ばな）	○
128				
9	胸	○	むな むね	○
9	言	○	いえる いひ いふ こと（ごと）	○
(130)				
9	紙	シ	かみ（がみ）	○
9	者	シャ（ジャ）	もの	○
9	若	ニャ	わか わかい	○
9	主	シュ シュウ	○	○

ス（ズ）

9 状 ジャウ ○ ○

9 石 セキ いし

9 川 ○ かは（がは） ○ 重―おもし 流―さすが

9 箱 ○ はこ（ばこ） ○

9 着 ○ き（ぎ） きせる きる つく ○

9 仲 ○ なか ○

(140)

9 當 タウ（ダウ） あて あてる ○

9 男 ナン をとこ ―根まら

9 馬 ○ ま むま ―士まご

9 八 ハチ ハツ や ○

9 髪 ハツ かみ 白―しらが

9 間 ○ とひ（どひ） とふ ○

146

8 寄 キ より よる ○

8 橋 ○ はし（ばし） ○

8 藝 ゲイ ○ ○

8 好 ○ ずき すく ○

(150)

8 香 カウ キャウ か ○

(160)

8思　シ　おもふ　○
8守　ス　もり　○
8酒　○　さけ（ざけ）　神—みき
8笑　○　わらひ　わらふ　ゑ　○
8世　セ　よ　○
8前　○　まい　まへ　○
8爪　○　つめ　○
8蔵　ザウ　くら　武—むさし
8太　タ（ダ）　タイ　ふと　○
8帳　チャウ　○　蚊—かや
8添　○　そひ　そふ　そへ　○
8婆　ポ　ば　ばば　穏—とりあげばば
8病　ビャウ　やまひ　やみ　○
8父　○　ちち　伯—をぢ
8舞　○　まひ　まふ　○
8腹　○　はら　○
8名　ミヤウ　メイ　な　○
8明　○　あき　あく　あけ　あける　○

8	譽	○	ほめる　ほれる
(170)			
8	用	ヨウ	もちゐる
8	落	○	おちる　おとし　おとす
8	留	ル	とめる
8	隣	○	となり
8	連	レン	つれ（づれ）　つれる
175			
7	異	イ	○
7	隠	イン	かくす
7	汗	○	あせ
7	眼	○	め
7	吉	キ　キチ	よし
(180)			
7	巾	キン	ふき　ふく
7	穴	○	あな
7	建	○	たつ　たて　たてる
7	櫛	○	くし
7	舟	○	ふね（ぶね）
7	袖	○	そで
7	勝	ショウ	かつ

○
○
○
○
○
注ーしめ
○
ー家かくれが
○
白ーにらむ
○
○
○
○
○
○

7織　○　おり　○

7粋　スイ　○　いけ　○

7生　シャウ（ジャウ）　いける　うまれる　壬―みぶ　○

(190)

7雪　セツ　ゆき　○

7銭　セン　ぜに　○　―子むすこ

7息　○　いき　○

7智　チ（ヂ）　○　飛―あすか

7鳥　○　とり（どり）　―産みやげ

7土　ド　○　○

7湯　タン　ゆ　煙―きせる

7筒　○　つつ　○

7突　○　つき　つく　つっ　○

7半　ハン　なか　なかば　○

(200)

7不　フ　○　○

7綿　メン　わた　○

7門　モン　かど　○

7様　ヤウ　さま　○

7量　リャウ　○　○

7 喰 ○ ぐひ くふ ○ ―達だて

(206)
6 伊 イ ○ ―人ひとり

6 壱 イチ ○

6 羽 ○ は ○

6 雨 ○ あま あめ さめ 白―ゆだち

(210)
6 恵 エ ○ ○

6 煙 ○ けぶり ―筒きせる ―艸たばこ ―草たばこ

6 火 ○ ひ ○

6 何 ○ なに なん ―所どこ

6 呵 ○ しかり しかる ○

6 過 クワ すぎる ○

6 角 ○ かど つの ―力すまう

6 近 キン ちか ○

6 結 ケツ ゆひ ゆふ ―納たのみ

6 惚 ○ ほれ（ぼれ） ほれる ○

(220)
6 西 サイ にし ○

6 祭 ○ まつり まつる ○

6 済 ○ すむ ○

6 最 ○ も もう ○
6 指 ○ ゆび ○
6 詞 ○ ことば ○
6 七 シチ ○ ○
6 這 ○ はひ（ばひ） はふ ―入はひる
6 首 シュ くび ○
6 受 ○ うけ うける ○
(230)
6 宿 シュク やど ○
6 聲 ○ こゑ（ごゑ） ○
6 脊 ○ せ せな ○
6 千 セン ち ○
6 駄 タ ○ ○
6 臺 ダイ ○ ○
6 團 トン（ドン） うちは ○
6 虫 ○ むし ○
6 朝 ○ あさ 今―けさ
6 天 テン ○ ―窓あたま ―鵝絨ビロード
(240)
6 殿 ○ との（どの） ○

6 年 ネン とし ○
6 能 ノウ よい よう ○
6 番 バン ○ ○
6 筆 ヒツ ふで 土ーつくし
6 分 フン（ブン） わけ ○
6 力 リキ ○ 角ーすまう
6 悋 リン ○ ○
6 戀 ○ こひ こひし ○
6 老 ラウ おい ○
(250) 6 籠 ロウ かご こ こもる ○
6 六 ロク ロッ ○ ○
6 [illegible] ○ さま さん ○
253 5 安 アン やす ー房あはう
5 違 ○ ちがふ ○
5 衞 エ ○ ○
5 越 ○ こえ こす ○
5 廻 クワイ まはり まふ ○
5 外 ゲ ほか ○

(260)

5 其 ○ そ その ○

5 器 キ ○ ○ ○

5 九 ク ○ ○ ○

5 牛 ギウ うし ―膝ゐのこづち

5 巨 コ ○ ○

5 形 ○ かた（がた） なり ○

5 京 キャウ ○ ○

5 工 ク（グ） ○ ○

5 黒 ○ くろ くろし ○

5 次 シ（ジ） つぎ ○

5 姉 ○ あね ○

(270)

5 字 ジ ○ ○

5 捨 ○ すてる ○

5 床 ○ とこ（どこ） ゆか ○

5 松 ○ ま まつ ○

5 深 シン ふか ふかい ○

5 吹 ○ ふき ふく ○

5 數 ス（ズ） かず ○

5 折 ○ をり をる をれる ○

5 舌 ゼツ した ○

5 扇 ○ あふぎ —子あふぎ ○

(280)

5 早 ○ はや はやい

5 草 ○ くさ —臥くたびれ 煙—たばこ —鞋わらぢ

5 退 ○ のき のく ○

5 替 ○ かはり かはる かへ（がへ） ○

5 代 ダイ かはり よ ○

5 燧 タツ ○ ○

5 竹 ○ たけ ○

5 直 ○ すぐ なほす ね ○

5 庭 テイ そこ ○

5 提 チャウ さげる ○

(290)

5 点 テン ○ ○

5 田 ○ た（だ） —舎るなか

5 等 ○ ら ○

5 梅 バイ むめ 入—つゆ

5 帆 ○ ほ ○

5 濱 ○ はま ○
5 附 ○ つけ ○
5 片 ○ かた ○
5 返 ヘン ○ ○
5 抱 ハウ（バウ） だく ○
(300) 5 夢 ○ ゆめ ○
5 紋 モン ○ ○
5 役 ヤク ○ ○
5 裏 ○ うら ○
5 呂 ロ ○ ○
5 和 ワ ヲ ○ 日ーひより

使用度数が五回以上のものは右ですべてであるが、これは使用字種全体一一〇九字のうちの三〇五字であり、ほぼ『新木畝』での状況と同様である。また、出入りはあるものの出現する字種についても相似た状況である。

一方、使用度数が四回以下のものについて略述すると、四回のものは「医」など八三字、三回のものは「愛」など一三七字、二回のものは「握」など一九八字、一回のものは「阿」など三八六字である。

四　字音の用法のみの漢字と字訓の用法のみの漢字

使用度数が五回以上の漢字と使用度数が一回の漢字とについて、字音の用法のみのものと字訓の用法のみのものとに分けてそれぞれ概観を行う。掲出にあたっては索引掲出順とし、字音、字訓については、使用度数が五回以上の漢字は使用度数を掲げたときの例にならい、また、使用度数が一回の漢字では索引での掲出法にならうこととする。

(一)使用度数が五回以上の漢字

㊀字音の用法のみの漢字

異イ　恵ヱ　衞エ　氣キ　器キ　義ギ　客キャク　九ク　巨コ　京キャウ　藝ゲイ　工ク(グ)　座ザ　字ジ　七シチ　主シュ　シュウ　ス(ズ)　狀ジャウ　粹スイ　駄タ　臺ダイ　燵タツ　智チ(ヂ)　茶チャ　点テン　番バン　不フ　返ヘン　房ハウ(バウ)　紋モン　役ヤク　理リ　恪リン　呂ロ　六ロク　ロッ

㊁字訓の用法のみの漢字

違ちがふ　引ひき(びき)　ひく　ひっ　羽は　有あり　越こえ　こす　屋や　火ひ　呵しかり　しかる　汗あせ　顔かほ(がほ)　其そ　その　胸むな　むね　橋はし(ばし)　形かた(がた)　なり　穴あな　建たつ　たて　たてる　遣つかひ　つかふ　やる　呼よび　よぶ　尻しり　好ずき　すく　黒くろ　くろし　惚ほれ(ぼれ)　ほれる　言いえる　いひ　いふ　こと(ごと)　祭まつり　まつる　済すむ　最も　もう　姉あね　指ゆび　詞ことば　持もち　もつ　櫛くし　捨すてる　取とり(どり)　とる　受うけ　うける　舟ふね(ぶね)　袖そで　床とこ(どこ)　ゆか　松ま　まつ　笑わらひ　わらふ　ゑ　娘むすめ　場ば　織おり　身み　針はり　親おや　吹ふき　ふく　聲こゑ(ごゑ)　脊せ　せな　折をり　をる　をれる　川かは(がは)　前まい　まへ　爪つめ　早はや　はやい　箱はこ(ばこ)　待まち　まつ　退のき　のく　替かはり　かはる　かへ(がへ)　知しらす　しる　しれる　置おき　おく　竹たけ　着き(ぎ)　きせる　きる　つく　仲なか　虫むし　直すぐ　なほす　ね　店たなみせ　添そひ　そふ　そへ　殿との(どの)　等ら　突つき　つく　つっ　咄はなし(ばなし)　はなす　買かふ　賣うり　うる　うれる　帆ほ

嚊かか　寐ね　ねさす　ねる　ねん　鼻はな（ばな）　濱はま　付つき　つく　つけ　つける　附つけ　舞まひ　まふ　腹はら　片かた　夢ゆめ

あき　あく　あけ　あける　目め　問とひ（どひ）　とふ　聞ききき　きく　也なり　野の　又また　譽ほめる　ほれる　落おちる　おとし　おとす

裏うら　立たち（だち）　たつ　たて　たてる　隣となり　戻もどり　もどる　戀こひ　こひし　喰ぐひ　くふ　𠆢さま　さん

㈡使用度数一回の漢字

㈠字音の用法のみの漢字　（　）は振り仮名のないもの

挨アイー　惡アクー　按（アン）ー　庵アン　菴ーアン　印インー　宇ー（ウ）　椽ーエン　華ーケー　介カイー

怪ケー　界ーカイ　會（クワイ）ー　岳ーガクー　官クワンー　柑ーカン　看カンー　疳カンー　勘カンー　感カンず

漢ーカン　寛ークワン　觀クワンー　忌ーキ　奇キー　儀ーギ　姜ーガー　鄕ーキャウ　極ゴクー　句（ク）

具ーグ　愚グー　屈ークツ　群ーグンー　稽ケイー　験ゲンー　玄ゲンー　庫ーコ　碁ゴ　公ーコウ

仰ギャウー　庚カウー　皇ー（ワウ）　構ーコウー　細ーサイー　斎ーサイ　歳ーザイ　在ザイー　拶ーサツー　旨ーシ

至ージ　始シー　慈ジー　辞ジー　質ーシツ　実ジツ　尺ーシャク　抄シャクー　釋ーシャクー　珠ジューー

趣シューー　繻ジュー　宗シュウー　秋ー（シウ）ー　修ーシューー　集ーシュ　祝シウー　術ージュツ　暑ショ　肖ーセウ

尚ーシャウ　猩シャウー　粧ーシャウ　照ーセウー　裳ーシャウ　食ージキ　蝕ーショク　燭ーショク　申ーシン　施ーセ

正シャウー　姓ーシャウ　清（セイ）ー　拙ーセツ　仙センー　疝センー　泉センー　煎センず　線センー　氈ーセン

曾ソー　走ーソウ　惣ソウー　掃サウー　嫂ーザウ　瘡ーソ　艘ーザウ　題ーダイー　壇タンー　痴ーチ

馳チー　筑ツクー　定ーデャウ　貞テイー　亭テイー　堵ードー　銅ー（ドウ）　祢ネー　悩ーナウ　濃ーノ

唄バイ　茁ハクー　煩ボンー　盤ーハンー　悲ーヒ　緋ーヒ　誹ハイ　賓ビンー　婦ーフ　服ーフクー

福フク　蒲フー　奉ホウー　帽ーボウー　睦リク　盆ボン　饅マンー　蜜ミー　妙（メウ）　面ーメ

盲ーマウ　由ーユウ　耀ーエウ　欲ヨク　羅ラー　乱ラン　蘭ラン　李ーリー　陸ロクー　律リチー

瑠ールー　慮ーリョ　痲リンー　類（ルイ）　列ーレツ　炉ーロ　盧ール　鹿ロクー

㈡字訓の用法のみの漢字　（　）は振り仮名のないもの

唖おし　哀あはれ　闇ーくらがり　育ーそだち　匂（にほ）ふ　運はこぶ　永ながい　鳶とび　化ーなまり　瓦かはら

芽め　俄にはかー　堺さかひ　蓋ふた　懐ふところー　鱠ーまなす　咳せき　骸から　覚さめる　筈はず

肝きも　巻まきー　酣たけなは　姫ひめ　鬼おに　崎ーざき　幾いくー　機はた　櫃ひつ　識そしる

吃どもり　久（ひさ）しー　及およぶ　舅しうと　共ー（ども）　鏡ーかがみ　隅すみー　堀ーほり　郡こほりー　計（ばか）り

契ちぎり　迎むかひ　欠あくび　血ち　件くだん　兼ーかねる　蜆しじみー　絹きぬー　鑓やりー　元ーもと

姑しうとめ　股ーまた　菰ーこも　袴はかま　語かたり　叩たたく　吼ーぼへ　号ーなづけ　告つげー　骨ほね

蓑みの　罪つみ　削けづる　杉すぎー　傘かさ　霰あられ　市ーいち　只ただー　死しぬ　枝えだ

柿かき　姿すがた　疵きずー　歯はー　飼ーがひ　雌めん　漬つける　治おさまる　咽ささやく　餌ゑ

鮒はぜー　煑にー　狩かりー　樹きー　萩はぎ　摺すれー　戎ー（えびす）　拾ーひろひ　馴なれる　助すける

舛ますー　招まねく　咲さく　渉わたしー　商あきなひー　隼こげる　蛸たこ　衝ついー　錵けぬき　津ーづ

震ふるふ　盡つきる　垂たれる　皺しわ　星ほし　凄すごい　晴ーはれ　責せめー　積つむ　茜あかねー

揃そろふ　撰えりー　蟬せみ　鱧うなぎ　双ふたー　送ーおくり　掻かく　箒はうき　漕ーこぎ　造ーつくり

憎にくむ　側ーがは　村ーむら　棹さす　詫わび　短みじこ　彈ひく　斷ことわり　灘なだ　池ー（いけ）

恥はぢ　遅おそい　沖おきー　柱ーはしら　紐ひも　紬つむぎー　苧をー　張ーはり　眺ながむ　調しらべる
鯛ーたい　沈ーしづみ　追おひー　痛いたー　笛ふえ　敵かたきー　都みやこ　渡わたる　奴やっこ　透すきー
桃もも　稲いなー　踏ふみー　鬧いそがしー　藤ふぢー　肉しし　刃ーば　捻ねぢる　燃もえる　巴ーともエ
破われ　佩さす　背そむく　貝ーかい　媒なかだち　泊ーどまり　剝ーはぎ　薄うすい　抜ぬく　比ーごろ
氷（こほ）り　苗なへ　釜ーがま　馥ききー　刎ーばね　並なみー　瓶ーべー　餅もち　鼈がさ　變かはる
包つつむ　苞つと　峯みね　訪とふ　豊てー　茅かや　弥ー（や）　命（いのち）　迷まいー　爺とと
訳わけ　尤（もっとも）友（とも）　蚰げぢ　誘さそふー　雄ーをー　孕はらむ　容なり　靨ゑくぼ　裸はだか
瀬ーせ　里さとー　履はく　柳やなぎ　涼すずみー　蓼たでー　淋さびし　冷ひや　露つゆー　鱸すずき
腕うで　辻つじー　俤おもかげ　褄つま　鰯いわし　畑ーばた

尚、使用度数が一回の漢字で熟字訓の用法のみのものについて、字音の用法のみのものや字訓の用法のみのものとの関連からここに掲げる。

阿（ー波あは）　鴛（ー鴦をし）鴦（鴛ーをし）　穏（ー婆とりあげばば）　臥（草ーくたびれ）　鵝（天ー絨ビロード）　晦（大ー日おほみそか）　鞋（草ーわらじ）　蕎（ー麥そば）　鶏（水ーくひな）　瞽（ー女ごぜ）　桁（ー立ついたて）　昨（ー日きのふ）
濕（ー布しめし）　從（ー弟いとこ）　絨（天鵝ービロード）　壬（ー生みぶ）　艸（煙ーたばこ）　注（ー連しめ）　剃（ー刃かみそり）　歩（御ー徒おかち）　蚊（蚊ーかや）

おわりに

今回の報告においては、山田俊雄氏による『新木賊』での調査結果となるべく比較しうるようにつとめた。『新木賊』での結果と比較すると、全く振り仮名の与えられていない漢字において、共通するものもあるがそうでないものも多い。これは前述のように、取り扱われる内容にもその都度相違が見られるということと、資料の量的な問題とによると考えられる。現時点では資料間の比較により結論を云々すべきではなく、山田俊雄氏の指摘された全く振り仮名の与えられない漢字に関する性質などをもふまえ、さらには、どのくらいの数のまたは分量の資料を扱えば漢字の使用状況の把握が可能であるかという点も考慮に入れて、さらに多くの資料について調査の積み重ねが必要であると考えられる。

注

(1) 前回の報告以前のもので掲げることのできなかったものも含める。

○山田俊雄氏「近世常用の漢字㈢――『冠附かゞみ磨』の用字について――」（『成城國文學論集』第十七輯・昭和六〇年八月）

○山田俊雄氏「近世常用の漢字㈣――『冠附若とくさ』の用字について――」（『成城國文學論集』第十八輯・昭和六二年二月）

○エッコ・オバタ・ライマン、山田俊雄両氏「近世常用の漢字――『冠附机之塵』の用字について――」（『成城文藝』第一二一号・昭和六三年二月）

○山田貞雄氏「明治一知識人の用字――森鷗外「青年」について――」（『図書館情報大学研究報告』第七巻一号・一九八八年）

○山田貞雄氏「明治一知識人の用字二――森鷗外『青年』における同一語表記の変容について――」（『図書館情報大学研究報告』第八巻一号・一九八九年）

○山田貞雄氏「明治一知識人の用字三――森鷗外『青年』における同一語表記の変容について(二)――」（『図書館情報大学研究

報告』第八巻二号・一九八九年）

○山田俊雄氏「近世常用の漢字――「西鶴置土産」の場合――」（「成城國文學論集」第二十輯・平成二年三月）

(2) 掲げる用例が前回の報告の索引におけるものと違っている場合があるが、それは今回の報告にあたっての見直しによるものである。以下、掲げる用例についてはすべてこの通りである。

(3) 山田俊雄氏「近世常用の漢字――雑俳『新木賊』の用字について――」（『成城文藝』第一〇五号・昭和五八年一二月）。以下、『新木賊』にかかわる部分はすべてこの論考による。

(4) 注(1)で掲げた、エツコ・オバタ・ライマン、山田俊雄両氏による『冠附机之塵』を対象とした調査では、「ゑ」には振り仮名として「さ」が、送り仮名として「ン」が与えられていると報告されている。